

SKIPシティ国際Dシネマ映画祭2017



中山 秀一

休日にはイベントが開かれ家族連れの市民で賑わう

毎年梅雨明けの時期、7月中旬の土曜から翌日曜日まで、9日間にわたって行われるこの国際映画祭、今年は7月15日から23日にかけて開催された。

開催場所は、埼玉県川口市にある映像制作の総合施設「SKIPシティ彩の国ビジュアルプラザ」で、広い中庭を囲むように映像関係の施設が建ち並んでいる。休日にはこの広い中庭ではイベントが催され屋台も並び、地元川口の住民たちが家族連れで訪れる。

この施設に隣接する広大な土地は、映画撮影のオープンセットが建てられるようになっており、2014年に周防正行監督の『舞妓はレディ』が撮影された事でも知名だ。このような、日本のハリウッドにもなり得る環境のもとで、この国際映画祭が開催される。

☆オープニング作品の上映

この映画祭では、日本作品で受賞したこ



002- 上映された堀江貴大監督の「ANIMAを撃て！」
©2017 埼玉県 / SKIPシティ 彩の国ビジュアルプラザ

とがあり、将来性を見込める若手監督には、映画祭当局がその監督の次回作のために支援を行う制度が出来ている。

その一環として、映画祭のオープニングセレモニーでは、上記の支援で製作した若手監督の作品を、「オープニング上映」と称して特別上映をする。今年は、堀江貴大監督の『ANIMAを撃て!』が上映されて、この爽やかな作品が、映画祭の初日を飾った。(作品の内容紹介は後述)

堀江監督は、昨年の長編部門にノミネートされた『いたくてもいたくても』の監督で、筆者はこの作品が大のお気に入りである。「ジャパネット00」のパロディ「ジャパネット・ショッピング」という通販番組のプロダクションを舞台に、若い男女の仕事ぶり和生活ぶりをコミックに描いて、しかもペースを感じさせるという、喜劇の原点を思わせる作品だ。

☆上映作品の内訳

この映画祭のコンペは、①長編部門、②短編部門、③アニメーション部門、の3部門で行われる。

①長編部門

今年は、世界85の国と地域から617本の応募があり、一次審査で下記の12本がノミネートされた。

その内訳は、海外作品9本と国内作品3

本の計12本、作品の条件は、長編映画の制作本数が4本までの監督で、70分以上の作品である。

注：賞の内容は《作品紹介の項》に付記

②短編部門（国内作品のみ）

今年は、153本の応募の中から一次審査を経た12本がノミネートされた。国内の若手映像クリエイターの発掘育成を目的に、2016年、2017年に完成した15分～30分の作品である。

注：賞の内容は《作品紹介の項》に付記

③アニメーション部門

日本のアニメーション作家の発掘を目的に、2015年以降にデジタルで制作された30分以下の国内作品を公募、40本のエントリーから10本を上映。

☆表彰式

色々な意味での熱い7日間の上映審査を経て、最終日の7月23日の日曜日、午前11時からクロージングセレモニーが始まり、審査の結果が発表された。受賞作品のタイトルは、埼玉県知事の上田清司・実行委員会会長をはじめ、主催者側の役員により順次開封発表された。今年の各部門の審査員長は次の方々である。

《長編部門》

○国際審査委員長：黒沢 清（日本）映画監督



長編部門国際審査委員長・黒沢清氏



短編部門審査委員長・榎井省志氏



アニメーション部門審査委員長・小出正志氏

《短編部門》

○審査委員長：榎井 省志（日本）株式会社アルタミラピクチャーズ代表取締役、映画プロデューサー

《アニメーション部門》

○審査委員長：小出 正志（日本）

アニメーション研究者、東京造形大学教授

☆受賞作品

【長編部門受賞作品 国際（4 作品）】

- ①最優秀作品賞：『愛せない息子』ノルウェー
監督：アーリル・アンドレーセン
- ②監督賞：『中国のゴッホ』中国、オランダ
監督：ハイボー・ユウノキキ・ティエン
チャー・ユウ
- ③審査員特別賞：『市民』ハンガリー
監督：ローランド・ヴラニク
- ④SKIP シティアワード：
『三尺魂』日本 監督：加藤悦生

【短編部門受賞作品 日本（3 作品）】

- ①最優秀作品賞：『冬が燃えたら』
監督：浅沼直也
- ②奨励賞（2 作品）
『サイレン』 監督：三宅伸行
『追憶ダンス』 監督：土屋哲彦

【アニメーション部門 日本（3 作品）】

- ①最優秀作品賞：
『I think you're a little confused』
監督：小川育
- ②奨励賞（2 作品）
『The Interpreter』 監督：尾角典子
『竹田駅メモリーズ』 監督：浜村満果

☆長編部門国際審査委員長・黒沢清氏の講評

充実した映画祭の1週間であった。アルメニア、イスラエル、ネパールなど、色々

な国で製作された作品はどれもレベルが高く、選考は難航すると思われた。しかし聞いてみると、4人の審査員の意見はほとんど同じであった。したがって審査はあっという間に終わったので、正直なところほっとした気持ちだ。

偶然なのだが、結果として今回選出された作品は、全てこの映画祭が初めての応募だったことを報告する。選に入らなかった作品も、みな個性的で素晴らしいものばかりだ。すべての映画に感謝したい。

☆短編部門審査委員長・榎井省志氏の講評

短編について今までは、将来長編を撮る監督のための登竜門だという考え方であった。しかし今年の作品を観ると、ほぼプロフェッショナルの方々による短編コンペティションになったと言えると思う。

今回ノミネートされている短編は、大学の卒業製作のたぐいではなく、自主制作も含め、何かの課題で作られた短編だといえる。場合によっては、街おこしの課題で作った作品もあると思う。さまざまな商業的な支えと制約のなかで、自分の表現したいものにチャレンジするという姿に敬意を表したい。

☆アニメーション部門審査委員長・小出正志氏の講評

長編から短編、そしてアニメーションまでを擁する総合的なこの映画祭にあって、「撮影するアニメーション」も対象の一つとして盛んになることを願っている。それがこの映画祭の特色の一つとなって、映画祭がさらに盛り上がることを期待している。

今回も素晴らしい作品が集まっている。しかしこの部門はまだまだ新しいので、応募作品も多くないが、さらに応募が増えることを期待している。



006-『ANIMAを撃て!』 果穂は意中の人・伊藤のドラムと共演で受験する
©2017 埼玉県 / SKIP シティ 彩の国ビジュアルプラザ

☆オープニング作品『ANIMAを撃て』の紹介

冒頭でも触れたが、この作品の堀江貴大監督は、前作『いたくてもいたくても』が全国劇場公開を果たして話題になったが、今回は前作に続く長編の第2作目の映画だ。この作品は、爽やかとか、すがすがしいという形容が実に相応しいのだ。その大きな理由は、この種によくある、とって付けたような嫌らしい男女のイチャツキのシーンが無いからだと思う。

このタイトルの「ANIMA」は見慣れない言葉なので調べたら、古代ギリシャ語に端を発するラテン語で「魂」の意味を持つとあり、心理学者も関わる複雑な意味深のルーツらしい。多分、映画の女性主人公果穂が、目標の男性に放つ心の矢を意味しているのだろうか、それとも己の前途に向けて放つ意志の矢か…。

クラシックバレカンパニー「BAN」に所属する果穂は、留学支援の試験に挑むつもりだが、美人で同期のライバルもいることだし、本当に自分の進む道は今のクラシックバレでよいのかと悩んでいた。合間をみてホールの倉庫で創作ダンスを練習している果穂。それを垣間見たホールの若い管理人・伊藤が、果穂に心を奪われる。

一次試験をパスした当日、倉庫の中から伊藤がドラムを演奏しているのが聞こえて、



007-『愛せない息子』ダニエルは生まれ故郷のコロンビアで心が変わる
©Norsk Film Distribusjon Motlys



グランプリ受賞の挨拶をする脚本家のヒルデ・スサン・ヤークトネスさん

伊藤がかつてドラムの演奏をやっていたことを知る。果穂は次の試験のコンテンポラリー部門に、伊藤を誘って彼のドラム演奏と共演で受験すること決める。

その動きを知った、カンパニーの担当教師が、伊藤を呼びつけて事情を聞くことになった。てっきり苦情を言われるものと思っていた伊藤だが、最後になって担当教師から出た言葉は、果穂をよろしく頼む、という言葉で、伊藤は呆然とする。

一方果穂は、伊藤に向かって「私は伊藤さんが好きです！」と愛の告白を爽やかに堂々と、しかも一方的に大声で告げる。それを聞く伊藤の顔は、撮影のライティングで、目の部分を影にしてあるので表情が読み取れない。わずかに、目じりのあたりが汗のような水滴で濡れているのが見えるが無表情のようだ。

果穂から一方的に高々と愛の宣言を受けたので、戸惑っているのか、緊張しているのか、一介のホールの管理人と、前途あるバレリーナとのバランス？…等々、それは観客の想像に任される。

☆長編部門の受賞作品紹介

①『愛せない息子』ノルウェー(グランプリ)
主催者賞・賞状、トロフィーの授与、ソニーDシネマアワード：副賞：賞金100万円
この作品は、ノルウェーという、北極の

近くにある静かで地味な北国に住む家族の物語だ。この家族は5歳くらいの可愛い一人息子ダニエルとの3人で、ダニエルの父親は海上油田の技術者である。

ところが、息子ダニエルの生まれは遥か遠くの、赤道近くにあるコロンビアなのだが、正規の手続きでこの家族の養子となっている。父親は仕事から、油田の現場に向いて家を空けることが多く、当然ダニエルはママの方によくついているようだ。

ところが、ママが交通事故で亡くなってしまい、父親は何とかダニエルになつてもらいたいと、職を変えることも考えて努力する。ママを亡くして間もないので、そう簡単にパパと言って甘える筈もなく、ダニエルはすねたりかんしゃくをおこしたり、パパを悩ませる日々が続く。

思い余った父親は、ダニエルの切れやすくてかんしゃくを起こすのは、生みの母親の性格を受け継いだ先天性のものだと思うようになる。そして養子縁組を解消してもよいと考えはじめたようだ。

そこで父親は、休暇を取ってダニエルを伴い、ダニエルの生まれ故郷コロンビアへ、実の母親探しに出かける。ホテルではさっそくダニエルがおねしょをしてパパをいっそう悩ませる。

コロンビアはラテンの国、人々の性格は貧乏でも楽天的、パパの国ノルウェーとは正反対の文化だ。観客も一転異なる明るい映像に、新たな展開を期待して心が弾む。そこで父親は、地元の個人タクシーのドライバーと交渉し、1日200ドルで借り上げて、本格的に生みの母親探しを始める。

このドライバーは、パパがラテン男と呼ぶだけに、気の良い独身のだて男(上方落語の桂米朝そっくり)で、結構な住宅に妹と子供と母親が同居してにぎやかだ。実母を探しまわる間、姉がダニエルを預かってくれて、二人は街を走り回る。その間ダニエルは、姉の子供たちからかわれて切れたりするのだが…。

映画は、観客への息抜きサービスか、交差点の真ん中で、信号が変わるまでの合間に自転車の曲乗りで日銭を稼ぐ男が居たり、南国ラテンの国ならではの楽しさを見せてくれる。



009-『中国のゴッホ』この細長い工房でゴッホのレプリカを量産する ©YU Haibo



監督賞受賞の挨拶をするハイポー・ユウ監督

眼を疑うシーンもある。二人は気分転換のためか、夜のクラブに立ち寄り、強い酒をあおって、踊って騒いで店を出て、陸橋の歩道の上で酔い覚ましをしている。ドライバーは当然のように、陸橋の欄干に向かって立小便。何事もなかったように、二人はドライバーの車に乗り込んで帰宅。これには筆者もショック。

さてダニエルは、もと保護されていた施設を訪れると、当時を知る仲間から最初は歓迎されるが、結局は養子に出されたことなどで中傷をうけ、切れてしまうことを繰り返す。そのうちに、結局自分の安住の場所はパパの家だと自覚しはじめたようだ。やがてダニエルは、目の前のパパを自分の父親だと認めて、父親もそれを感じ取り、お互いに眼と眼が合ったときが、気持ちが解りあった瞬間であった。

結局今回は、実母を探し当てなかったが、いったん実家に戻り、父親は单身再びコロンビアを訪れるが、学校の用務員として、幼い娘を連れながら教室の掃除をしている生みの母親に会うことができた。そこで母親に発した父親の言葉は、「あなたはダニエルを生んだことに誇りをもってください」であった。

②『中国のゴッホ』中国、オランダ(監督賞)
主催者賞・賞状、トロフィーの授与、ソニーDシネマアワード：副賞：賞金50万円
これは、いかにも中国ならではの作品で、

めちゃめちゃ面白く、しかも考えさせるドキュメンタリー映画だ。映画の舞台は、中国・深圳市近郊にある「大芬（ダーフェン）油画村」という所だ。なんとそこでは、ゴッホをはじめとする、有名画家のレプリカ制作が産業として確立しており、実に世界市場の6割を生産しているといわれる。「油画村」という村の名前そのものが、絵画のレプリカ産業を意味しているのだ。

この映画の主演、ジャオ・シャオヨンという男性は、独学で絵を学び、20年もの間ゴッホのレプリカを描き続けてきた。住宅を改装した狭くて細長い工房で働く職人は、彼の奥さんと、兄弟、親戚などを集めた人たちだ。

彼のところには、100枚200枚という単位で注文が来るというが、同じ絵の注文枚数が多い時には、画の部分区分けして分業の流れ作業で制作するという。ゴッホの中でも、有名な「夜のカフェテラス」という絵が人気で注文が多いという。

その工房は狭くて細長いので、カニのように横に歩いて人を交わしており、職人たちは立ったまま壁に向いて黙々と絵筆を走らす。その描きっぷりは実に見事で、新しい布製のキャンパスに、下書きもせずいきなり「ひまわり」などをすらすらと書き上げてゆく。午後の昼寝の時間には、皆が上半身はだかで、床に直接ごろ寝をしている俯瞰映像が壮観だ。

あるとき、オランダの上得意客である画商から、飛行機代を自前で来れば、滞在費は見てやると話が舞い込む。シャオヨンは奥さんに相談するが、飛行機代などとても出せないと、相手にしてくれない。事実彼らの仕事は枚数こそ多くこなしているが、儲けが多いとは思えない。何とか奥さんを説得して、オランダに行くことになった。

オランダに着いてみると、呼んでくれたお得意客の画商とは、街角に立つキオスクのような、ゴッホ専門のお土産店ではないか。「なんだこんなところで売ってるのか」、シャオヨンはいささかがっかりして拍子抜けのようす。さらにその売値を見て「なんだ俺が売る値段の10倍以上で売ってる！」と不機嫌だ。そこにはある種の隙間風と悲

哀が感じられるシーンだ。

でも、俺の村みたいに小さな店がごちゃごちゃしてなくて、すっきりしてきれいな街だなあ、と感心することしきり。結局帰途にはパリに立ち寄って、ノートルダム寺院を覗いて帰国した。

帰宅すると、近所の連中を集めて、道端に乱立する小さな屋台で酒を飲みながら、しきりとオランダ・パリ旅行の自慢ばなしをして聞かせるのであった。

この作品は、ナレーションは一切なし、すべて登場人物の同録による音声で仕上げである。驚くのは、すべてのショットが手持ち撮影ではなく、しっかりとカメラが固定されて画面が安定していることだ。

膨大な分量の撮影をしたという、ハイポー・ユウ監督の話を知ると、多分、カメラを対象の人物に向けてしっかりと固定し、欲しい話が出るまで撮り続けるという撮影スタイルだと思う。

帰国後のシャオヨンさんは、レプリカだけでなくオリジナル作品も制作したいと行動に移している。

③ 『市民』ハンガリー（審査員特別賞）

主催者賞：賞状、トロフィーの授与、ソニーDシネマアワード：副賞：賞金50万円、

これは東欧の国ハンガリーの作品で、いまヨーロッパで大きな問題である移民を題材にしている。中年のアフリカ系黒人を主人公に、人種偏見、本音と建て前、好奇の目、等々人間の持つ表と裏に迫っている。

政治難民としてアフリカからハンガリーに移住してきた黒人ウィルソンは、市民権を得るためのハンガリー憲法の試験に何度も失敗していた。しかし、彼が働いていたスーパーの経営一家の娘が、彼の働きぶりを評価して、姉が受験対策の教師をやっているからと、姉のマリを紹介してくれた。その甲斐あってか、何回か挑戦の結果ついに合格を得ることが出来た。

あとは、市民権の交付を待つだけ、ハッピーな気持ちで正式の市民になる日を夢見ている。そのうちに、受験の指導をしてくれたマリとなんとなく出来てしまい、セックスを楽しむ間がらとなった。

あるとき彼の知人を頼りに、不法移民で



011-『市民』憲法試験に合格したウィルソンだが差別と好奇的



憲法試験に合格したウィルソンだが差別と好奇的

臨月に近いイランの女性が訪ねてきて、強引に彼の家に居候を決めてしまう。やがて女性は彼の部屋で産気づいて、彼の介護で赤子を産んでしまう。つまり、彼女は不法滞在のまま出産してしまったのだ。

その後、彼の部屋でマリとセックスをしているときに、別の部屋からもれる赤子の泣き声をマリが聞いてしまい、この事情を知ってしまう。あるとき、赤子が発熱したので、マリは彼の反対を押し切って、医者を呼んでしまう。当然、当局に報告がまわり、警察が押し入って母子を強制収容にしまった。

ウィルソンは、マリに対して、君は子連れのイラン女性に嫉妬して、彼女をこの家から追い出し、私を独占したかったのかと、責めることになる。

あるとき、マリをウィルソンに紹介した妹が、姉に対してひそひそ声で質問している、「どんな感じ?」「臭いは違うの?」「彼の体毛は固くない?」などと妹は興味津々である。

ウィルソンにはまだ市民権の交付が届かない。じつは、憲法試験に合格しても黒人には市民権の交付が下りないことがあるという噂がある。それを知ったウィルソンは、複雑になってしまった今の生活を清算して収容所の施設に向かうのだった。

④ 『三尺魂』日本（SKIP シティアワード）

SKIP シティアワード：国内作品を対象に、



013-『三尺魂』：物置小屋の三尺玉を囲んで議論をする自殺願望者 © 三尺魂 2017



SKIP シティアワードを受賞の加藤悦生監督

今後の長編映画制作に可能性を感じる監督に対して授与、主催者賞・賞状、トロフィーの授与

「自殺願望者たちよ、考え直せ！」というのがこの映画のメッセージだと思う。

ところがこの作品は、普通の劇映画という既成概念で観ていると、前半を過ぎるまでが退屈してしまうのは筆者だけだろうか。その前半とは、あるトタン張りの粗末な物置小屋の中という狭い空間で、男女4人の会話が舞台劇風に延々と繰り返されるのだ。

さてストーリーは、労務者風の中年男が、打ち上げ花火の「三尺玉」と称する、直径1メートルほどもある花火玉を、暴発しないように用心深くトタン板の仮設小屋に運び込み、小屋の真ん中に安置？する。

この男は、いわゆる花火師で、ある花火大会で不発玉を打ち上げてしまい、収入が絶たれて借金を背負い込む。そこで男は、小屋の中で三尺玉を爆発させて自殺し、生命保険を家族に残そうと企てたのだ。

しかし、同じ仲間がいるのではと思ったのか、インターネットを利用して、自殺願望者を募ると、3人の男女がこの花火小屋を訪れる。その3人とは、先ず気弱そうな男の若者が、ギーときしみ音をたてながらドアを開けて入ってくる。しばらく間をおいて主婦、さらに間をおいて女子高生。

一人が焦って点火ボタンを押してしまうと、爆発して画面は真っ白になる。ところが閃光が終わると、そこには花火師の男と三尺玉が、最初と変わらずに残っている。

花火師は先ほどは夢だったのかと疑っていると、以前と同じように、3人が集まり会話が進む。

だが、いかにも女子高生はまだ若いので、自殺を断念させようと意見が一致する。また誰かがボタンを押して爆発、画面が真っ白、というパターンが、5回ほど繰り返されるのだ。つまり、この小屋は、娑婆から霊界の世に行く途中の三途の世界のようだ。爆発がリセットされてまた元に戻る、というパターンが延々と繰り返されるのだが、その回が進むにしたがって、女子高生への説得が進む。それがきっかけで、3人の自殺願望に至った原因にも関心が向き始める。娑婆？時代（現実）の実写映像が挿入されて、次第に三人の自殺指向に至った原因が、個々に明かされてゆく。

最初の若者は病院に勤めるインターンの医師だが、鬱病だと言われて上司から適性を否定される。2番目の主婦は、小さな息子を乗せてドライブ中に事故で死亡させてしまい、夫の冷たい態度にも希望を失う。3番目の女子高生は、いま流行りの、学校での意地悪ないじめが原因である。

そして最終的には全員が自殺を思い止まることになる、というハッピーエンドである。

花火師は、花火大会に復帰して、彼が打ち上げた三尺玉が大空に開く大輪を、家族も共にハッピー姿で楽しんでいる。そして、さらに3人の数年後の幸せそうな生活も、サイレント風の映像シーンで印象的に見せるという心温まる演出だ。

大半にみられる繰り返しパターンの気張った演出から、終盤には打って変わって、柔らかな常道の演出ぶりに変わる対比がおもしろい。

繰り返すようだが、観終わってみると、あの小屋の中は、自殺願望者が彼岸を目指す途中の賽の河原の世界、そこで自殺願望の4人は議論した末、三途の川を渡らずに、娑婆に戻るという解釈をしてみると面白い。だとしたらこの映画は巧みな構成だ。

(注)：「観客賞」は、他の多くの海外作品を制してこの作品が選ばれた。やはり、昨



015-『冬が燃えたら』：重度認知症の母を連れて冬の網走に旅をするのだが ©Altan Cinemas



短編部門グランプリ受賞の挨拶をする浅沼直也監督



017-『水戸黄門Z』：お馴染み助さん格さんがロックのリズムで歌って踊る ©Mitokomon Z

今のいじめ自殺が社会問題になっているおり、この作品に観客が強く共感した結果だと思う。やはり映画はテーマとメッセージ性が重要だと感じた次第だ。

☆短編部門の作品紹介（日本）

①『冬が燃えたら』（短編グランプリ）

主催者賞：賞状、トロフィーの授与、川口市民賞：トロフィー、副賞：賞金50万円

この作品は、音楽のみで、セリフを一切なくしたサイレント映画の形式をとっている。重度の認知症で車いすの母と、髪の毛を青く染めた息子の青年が、真冬の一面凍りついた白の世界、網走湖へ観光旅行に行く。以前に若くて健全な頃、同じところに旅しているようで、昔の楽しかった思い出の地を、冬を選んで再び訪れたのだろうか。ときどきその楽しかった夏のシーンが挿入される。

旅行中、母親の症状は明暗の起伏が激しく、あるときは手に負えなくて、冷たい仕打ちをしてしまう息子は、母を強く抱きしめるより術がないようだ。

あるとき雪道の途中で、車いすから雪の



オープニングセレモニーでの長編部門、短編部門、アニメーション部門にノミネートされた監督、各賞審査員、プロデューサー、デレクター、実行委員の面々。

上に転がり落ちてしまう母親、息子は抱き起すつもりが、強く抱きしめてしまい、その腕に力が入って、母を窒息死させてしまう。抱き締められた母親の苦しそうな手の動きが止まってしまった。

彼は、息遣いも荒く、あわててタバコを取りだして、深々と煙を吸い込むが、荒い息が止まらない。別荘？自宅？に母の遺体らしきものを担ぎ込んで、食卓に座るのだがそこは明かりのない闇のような世界…。すると、明るい台所で、若い頃の母親がかいがいしく食事の支度をしており、やがてにこやかに食事を運んでくるが、母は闇に消えて食卓は相変わらず明かりがない暗い世界である。

○『水戸黄門』（選外・短編ミュージカル）

この作品は選には入らなかったが、筆者が期待していた作品なので紹介しよう。『水戸黄門』、このような定番の時代劇を、ミュージカルにしてみようという発想が素晴らしい。筆者が若い頃、高田浩吉が映画で歌う股旅ものを観たことがある。最近は歌う時代劇を見かけないが、このような短編の定番ものを、ミュージカルでシリーズ化でき

れば面白いと思う。

さて、ミュージカルには歌の部分とセリフの部分があるので、ロケーション撮影をするには、歌の部分を予めスタジオで録音しておく。その録音された歌をロケ現場で再生して、役者はそれを聞きながら「口ばく」で歌う。そして、セリフの部分はロケ現場で同時録音をするというのが普通だ。

この作品では、黄門さまはじめ助さんなど二枚目役者側はメロディー型の音楽で歌う。一方悪役の方は、もっぱらロック調の強烈なリズムで、どすが効く音楽にしてある。とくに悪役の親分が歌う演技と表情が大げさですごく面白い。一方二枚目風の助さんが旅先で知り合った町娘とのほのかな恋心を歌うシーンでは、さすがに彼はオペラのような歌手ではないので、二枚目役者を意識し過ぎか、歌っても表情が硬いのは理解できるという感じだ。その他チャンバラのシーンでもリズムのよい派手な音楽で、日本映画伝統のチャンバラが持つ「様式美」を大いに盛り上げて心地よい。

監督の大川祥吾氏は、これ以前に『サムライオペラ』を製作しており、ゆうばり国際ファンタジック映画祭ほか国内外の

映画祭で受賞しているという。さっそくYouTubeで観てみたらやたらと面白い、歌は英語で日本語の字幕という国際版、皆さんもどうぞご覧ください。大川監督の今後に期待。

☆あとがき

今回は、短編部門の一部と、アニメーション部門の作品紹介は、誌面の都合で割愛させて頂いた。

また長編部門で受賞した海外作品は、今後日本国内での公開予定は殆どないので、できるだけ詳しく、映画の結末まで紹介することにした。

なお「観客賞」が後日集計して発表されたが、短編とアニメーション部門では、プロが選ぶ作品との距離があり、筆者としては貴重な経験であった。

Syuichi Nakayama
日本映画テレビ技術協会名誉会員